

日本語能力と日本語学習動機づけの関係 ——タイ人大学生を対象にして——

宇都木 隆寿

1. はじめに

守谷(2002)は、言語学習において動機づけは、学習の開始から最終的な到達までのあらゆる段階で学習への関わりを決める重要な要因の一つであると述べている。Dörnyei(1999)は十分な動機づけは習得に長い年月がかかる外国語学習にとって積極的な学習を継続させるための推進力として重要な要因であると述べている。さらに、ドルニエイ(2005:3)は「動機づけが十分あれば、学習者は言語適性や他の認知特性の優劣に関係なく、L2⁽¹⁾の実用的な知識を身につけることができる。」と述べている。このように、外国語学習において動機づけは重要な要因である。日本語学習における動機づけと学習成果を関連づけた研究は、ネパール人を対象にした端野(2000)とタイ人大学生を対象とした成田(1998)、シンガポール華人を対象にした郭・大北(2001)などがある。しかし、ドルニエイ(2005)は、動機づけは学習者の各学習段階によって変化するものであると述べており、日本語能力の向上に伴う動機づけの変化の重要性を示唆している。日本語教育の分野において、学習が進むにつれて起こる日本語能力の向上と動機づけの変化の関係について述べた研究は管見の限りない。本研究は SPOT による日本語能力の測定と調査票による動機づけの測定から、両者の関係を明らかにし、長期にわたる日本語学習の動機づけ維持向上のための研究の基礎的な研究とする。

2. 先行研究

本稿では、動機づけの定義を Dörnyei(2001)の、なぜ(why)人がそれを行うのか、どのくらい(how long)その活動を維持しようとするのか、いかに(how hard)それを手に入れようとするのかを説明するものであるという定義を踏襲し、人間の行動の方向と規模を決めるものが「動機づけ」であると定義する⁽²⁾。

第二言語習得の分野で動機づけの重要性が盛んに指摘されるようになったのは、1960年代頃からである。Gardner & Lambert(1959,1972)、及び Gardner(1985)は、動機づけを統合的動機づけ(integrative motivation)と道具的動機づけ(instrumental motivation)とに大別し、ここから急速に研究が拡大した。日本語教育分野では日本語教育の世界的な広がりの中で、学習者個々が持つ背景にいかに対応していくべきかを探ることが急務になったことを受け、1990年代から動機づけ研究の必要性が叫ばれるようになった(倉八 1993)。

動機づけと学習成果の关系到言及した研究には以下のものがある。端野(2000)は、ネパール人

の、大学及び日本語学校に通う学習者を対象に調査を行い、統合的動機づけを持つ学習者よりも道具的動機づけを持つ学習者の方が、学習達成度が高いということを明らかにした。シンガポール華人大学生を対象にした郭・大北(2001)では「道具的動機づけ」と「エリート主義」因子を抽出し、成績向上に関係していたと報告している。

タイ人を対象とした動機づけの研究には以下のようなものがある。センジンダーヴォン(2008)は、初級学習者を対象に調査し、授業活動が動機づけに関連しており、学習者の動機づけを高めるのに有効な授業活動を模索することが求められているとした。ラタナヴィラクン(2009)では、ビジネスマンと大学生を対象に、動機づけとビリーフについて探り、日本語のコミュニケーション能力を高めることによって日本人と親交を深めたいという考えを持つということ、仕事につながる道具的動機づけのために文字学習をしているということを報告した。宇都木(近刊)は、タイ国内で学習するタイ人学習者と、日本で学習するタイ人学習者を対象に日本語学習動機づけ、「経験要因」について調査した。その結果、タイ国内の学習者は日本の学習者より動機づけが高いことを明らかにした。しかし、対象者の日本語能力にばらつきがあり、動機づけの差が学習環境によるものなのか、日本語能力によるものなのかはわからない。

動機づけと学習成果を関連づけた研究で、かつタイ人を対象とした研究として、成田(1998)がある。成田は、タイの大学生で日本語を専攻する4年生を対象に、動機の強さと定期テストの成績との関係を探り、「統合的志向」の動機づけが強い学生は成績が高く、「利益享受志向」「誘発性志向」の動機づけが高い学生は成績が低いことを報告した。しかし、この研究は達成度判定テストの結果を利用しており、学習者の統合的な日本語運用能力を反映した日本語能力と動機づけの関係を述べているとは言えない。ドルニエイ(2005)が動機づけは学習者の各学習段階によって変化するものであると述べているが、各学習段階を測るのに適切な方法を用いた上で、タイ人学習者の学習の進行と、それに伴う日本語学習動機づけの変化を調査する必要がある。

3. 目的

本稿では、SPOTを用いて測定した日本語能力の高さと調査票によって測定した動機づけの高さの関係を調査する。本稿の目的は、日本語能力と動機づけの関係を明らかにし、タイ人の日本語学習の動機づけ維持向上の研究のための基礎的な研究とすることである。

4. 調査概要

4.1 調査対象者

調査対象者の属性を表1にまとめる。

表 1 : 対象者の属性

対象者数	男性	15 名	女性	75 名	計	90 名
年齢	18-19	31 名	20-21	48 名	22 以上	11 名
学年	1 年生	35 名	2 年生	20 名	3-4 年生	35 名
学習歴	0-2 年	27 名	2 - 5 年	30 名	5 年以上	33 名
日本留学歴	有	17 名	無	73 名		
訪日歴	有	24 名	無	66 名		

本稿の対象者はタイ国にある大学で日本語を専攻している大学生 90 (平均年齢 : 20.1 歳 SD=1.53) 名である。学習歴が 2 年以下の学習者もいれば、5 年以上の学習者もいる。日本への留学歴がある対象者は 17 名、旅行や半年未満の短い研修などで日本を訪問したことがある学生は 24 名であり、66 名の対象者は日本へ一度も行っていない。

4.2 調査票

調査票は縫部他(1995)を参照し、作成した。質問紙は筆者がタイ語訳し、その後バックトランスレーションを行い、翻訳の的確性を確かめた。調査票は「非常にそう思う」から「全然そう思わない」までの 5 件法を作成し、解答してもらった。それぞれの得点は 5-1 点である。経験要因は、今までの日本語学習経験を「0-1 年」から「6 年以上」の 7 件で答えてもらった。また、訪日経験の有無、日本への留学経験の有無とその期間を聞いた。

4.3 SPOT

日本語能力を問うために様々な方法が考えられるが、本研究では、SPOT (Simple Performance-Oriented Test) を採用した⁽³⁾。SPOT は図 1 のような問題を目で追っていき、自然な速度の音声テープを聞きながら、文中の () に聞こえた音 (ひらがな 1 字) を書き込むテスト法である (小林他 1996)。

- (1) ^{とうきょう}東京行きのバスはど () ですか。

(2) この中^{なか}に何 () ^{はい}入っているんですか。

図 1 : SPOT の問題例 (Ver.B より)

一見、聴解テストのように見られがちだが、各機関で行われているプレースメントテストなどの相関の高さから SPOT は高い信頼性を得ており、統合的な言語能力を測定するのに有効であることが実証されている (小林他 1996, フォード丹羽他 1999)。また、SPOT は一般的に行われている言語能力の構成要素を部分的にチェックする筆記テストに比べ、より運用能力を反映しており、さらに話す能力をチェックする面接式テストに比べ、より採点が容易で、時間と手間がかからないという利点がある (小林他 1996)。SPOT は対象者のおおまかな能力に応じていくつかのバージョ

ンがあるが、今回の対象者は初級学習者が多数と想定される大学1-2年生を含んでいるため、声優の声で作成された明瞭な音声のSPOT_A、SPOT_Bを用いる。おおよそ、SPOT_Aは日本語能力検定試験3-2級、SPOT_Bは4-3級のレベルである。

4.4 調査時期及び調査手続き

2011年1月に筆者監督のもと、集団で調査票、SPOT_A,Bへの回答を求めた。まず、SPOTの練習問題をし、受験者にテストの回答方法を理解させた上で難易度の低いSPOT_B、難易度の高いSPOT_Aの順で行い、最後に調査票を記入してもらった。SPOTで使用した音声は筆者が用意した機材を用い、どの会場でも均一であった。なお、調査票の説明や注意事項などの教示もタイ語に翻訳し調査票に載せた。回答、説明、回収時間を含め調査所要時間は約25分であった。

5. 結果と考察

5.1 因子分析

本研究は、SPSS17.0を用い、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。この時、固有値1以上とした。共通性が0.14以下の著しく低かった項目、因子負荷量がいずれの因子においても0.35以下だった項目を削除し再度因子分析を行った。これを5度くり返し、最終的に合計11項目を削除した。最終的に抽出された因子とその質問項目、因子負荷量、および因子間相関を表2に示す。

表2：動機づけの因子分析の結果

因子1：道具的動機づけ $\alpha = .823$	因子				
	I	II	III	IV	V
Q40 日本語学習はキャリアアップに有効だから	.868	-.028	-.073	-.130	.067
Q37 日本人とコミュニケーションしたいから	.745	.096	-.347	.109	.033
Q34 日本語を勉強することは後々有利になるから	.671	.059	-.104	-.166	.107
Q25 日本の会社に就職したいから	.670	-.224	.139	-.123	.042
Q38 日本人と仲良くなりたいから	.615	-.049	.122	.183	-.293
Q28 今日語を勉強しないことは惜しいことだから	.571	.003	-.161	.373	-.142
Q23 将来日本で勉強したいから	.504	-.091	.120	.164	-.055
Q27 日本語は世界でも主要な言語の1つだから	.486	.190	.101	-.036	.070
Q26 日本語学習に挑戦したいから	.484	.172	-.240	.054	.158
Q33 日本人の友だちに手紙を書きたいから	.462	.320	.157	-.002	-.239
Q32 日本へ旅行に行きたいから	.431	.379	.316	-.144	-.159
Q22 日本語学習そのものに興味があるから	.401	.050	.287	.079	.023

因子 2 : 日本理解志向 $\alpha = .820$					
Q15 映画、テレビ、ラジオを理解したいから	-.033	.841	-.110	.091	.107
Q14 日本語の雑誌、新聞、小説を読みたいから	.143	.819	-.087	.078	.093
Q16 日本語の歌を楽しみたいから	-.053	.752	.145	.045	.005
Q13 日本語の書類を書きたいから	.043	.723	.035	.028	.065
Q12 日本語の書類を読みたいから	-.202	.491	.156	.143	-.058
因子 3 : 好奇心、興味 $\alpha = .816$					
Q20 タイ語と日本語の違いに興味があるから	-.107	.023	.774	-.005	-.018
Q18 文化の違いに興味があるから	-.152	-.041	.771	.112	.126
Q17 日本文学に興味があるから	.262	-.210	.705	.117	.221
Q21 自分の母語について詳しく知りたいから	.282	-.223	.666	.080	.199
Q19 他の文化を深く知りたいから	.077	.264	.560	-.215	.009
因子 4 : 誘発的志向 $\alpha = .813$					
Q9 卒業に必要なだから	.177	-.203	.086	.676	.009
Q31 日本語でいい成績をとりたいから	-.149	.265	-.072	.656	-.008
Q7 テストでいい点を取りたいから	-.008	.211	.252	.480	.060
因子 5 : 日本語学習への興味 $\alpha = .799$					
Q3 日本語のクラスが楽しいから	.009	.047	-.054	.089	.858
Q1 日本語学習を楽しんでいる	-.018	.211	.252	.252	.747
Q4 日本語の先生が好きだから	.254	.253	.223	-.266	.540
Q2 日本語が好きだから	.009	.047	-.054	.089	.511
因子間相関					
I	-				
II	.475	-			
III	.752	.621	-		
IV	.431	.416	.521	-	
V	.496	.547	.661	.321	-

因子分析の結果、5 因子が抽出された。また、因子分析後に各因子の α 係数を算出し、すべての値が 0.75 以上であり、信頼性のある項目であることを確認した。

宇都木(近刊)の因子分析の結果と、因子数、下位尺度の内容などほぼ同様の結果であった。このことから、日本語を専攻するタイ人大学生の日本語学習動機づけ因子はおおよそ上記の様相であるということが示唆された。

5.2 因子の命名

表 2 より、動機づけは 5 因子が抽出された。因子 1 は、40、37、34、25、38、28、23、27、26、33、32、22 の 12 項目からなる。「日本語を勉強しているのは、「日本語学習はキャリアアップに有効だから」、「日本人の友だちとコミュニケーションをとりたいから」、「日本語を勉強することは後々有利になるから」など、日本語を何かの目的の道具として利用しようとする志向が表れているため、これを「道具的動機づけ」とする。

因子 2 は、15、14、16、13、12 の 5 項目からなる。「日本の映画、テレビ、ラジオを理解したいから」、「日本語の雑誌、新聞、小説などを読みたいから」のように、日本を理解したいという志向が表れている項目が多く含まれていることから、これを「日本理解志向」とする。

因子 3 は、20、18、17、21、19 の 5 項目からなる。「タイ語と日本語の言語学的な違いに興味があるから」、「文化の違いに興味があるから」、「日本文学に興味があるから」のように、言語や文化への好奇心や興味を表れていることから、これを「好奇心、興味」とする。

因子 4 は、9、31、7 の 3 項目からなる。「卒業に必要だから」、「日本語でいい成績をとりたから」、「テストでいい点を取りたいから」のように、日本語を学習する理由が、日本語を学習すること自体に直接関係ないことを表しているため、これを「誘発的志向」とする。

因子 5 は 3、1、4、2 の 4 項目からなる。「日本語のクラスが楽しいから」、「日本語学習を楽しんでいる」のように日本語を学習すること自体に興味を持っていることが表れているため、これを「日本語学習への興味」とする。

5.3 SPOT の結果

表 3 : SPOT_A, B の結果 (N=90)

	平均点 (SD)	下位群	中位群	上位群	計	相関係数
SPOT_A	27.69 (23.59)	48	10	32	90	.962***
SPOT_B	32.69 (23.01)	27	26	37	90	

*** : $p < 0.001$

表 3 は SPOT_A, B の結果である。平均点から 1 標準偏差の範囲内の成績の者を中位群とし、1 標準偏差以下の者を下位群、1 標準偏差以上の者を上位群とした。自明ではあるが、SPOT_A と B は有意で非常に高い相関があった。また、SPOT_B では上位群において天井効果⁽⁴⁾が見られた。下位群と上位群との差という点において、SPOT_B に比べ SPOT_A の方が識別力があると判断し、本研究では対象者の日本語能力の指標として SPOT_A のみを調査に用いた。SPOT_A が日本語能力検定試験の 3-2 級のレベルであることから、下位群は初級、上位群は中上級の学習者であるといえる。

5.4 SPOT と動機づけ

5.4.1 相関関係

SPOT_A と動機づけ全体、及び各因子との相関係数を算出し、表 4 にまとめた。

表 4 : SPOT_A と動機づけの相関係数 (N=90)

	動機づけ全体	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5
SPOT_A	-.417***	-.485***	-.261*	-.494***	.002	-.415***

* : $p < 0.05$ ** : $p < 0.01$ *** : $p < 0.001$

表 4 より、SPOT_A と動機づけ全体、及び動機づけ各因子の間で因子 4 以外はすべて有意な相関が認められた。因子 2 は相関係数が小さいながら、有意な相関が見られた ($r = -.261$, $p < .05$)。また、有意な相関が認められたすべての因子は負の相関係数であり、このことから SPOT_A の得点が高い学生は動機づけ全体、因子 1、因子 2、因子 3、及び因子 5 の得点が低いということがわかった。逆に因子 4 「誘発的志向」は日本語能力の高さと相関がなく、下位尺度の平均値が 3.91 ($SD = .819$) で、どのレベルにおいてもある一定程度存在することがわかった。

5.4.2 一元配置分散分析⁽⁵⁾

SPOT_A の成績を下位群、中位群、上位群にわけ、一元配置分散分析を行った結果、動機づけ全体 ($F(2,87) = 6.794$, $p < .01$)、因子 1 ($F(2,87) = 10.871$, $p < .001$)、因子 3 ($F(2,87) = 10.845$, $p < .001$)、因子 5 ($F(2,87) = 5.297$, $p < .01$) において、有意差が認められた。これらの有意差があった項目のみ、どの群と群との間に有意差があるのかを見るため、Tukey 法による多重比較⁽⁶⁾を行った。

表 5 : SPOT_A と動機づけの Tukey 法による多重比較の結果

動機づけ全体	(I) SPOT_A 得点	1(下位群)		2(中位群)	
	(J) SPOT_A 得点	2(中位群)	3(上位群)	1(下位群)	3(上位群)
	動機づけ平均の差 (I-J)	.011	.337**	-.011	.326**
因子 1	(I) SPOT_A 得点	1(下位群)		2(中位群)	
	(J) SPOT_A 得点	2(中位群)	3(上位群)	1(下位群)	3(上位群)
	動機づけ平均の差 (I-J)	-.068	.614**	.068	.683***
因子 3	(I) SPOT_A 得点	1(下位群)		2(中位群)	
	(J) SPOT_A 得点	2(中位群)	3(上位群)	1(下位群)	3(上位群)
	動機づけ平均の差 (I-J)	.157	.588***	-.157	.431**
因子 5	(I) SPOT_A 得点	1(下位群)		2(中位群)	
	(J) SPOT_A 得点	2(中位群)	3(上位群)	1(下位群)	3(上位群)
	動機づけ平均の差 (I-J)	.327	.635**	-.327	.308

* : $p < 0.05$ ** : $p < 0.01$ *** : $p < 0.001$

表 5 に示した通り、動機づけ全体、因子 1、3、5 で、下位群と中位群の間には動機づけに有意差は認められなかった。しかし、下位群と上位群では、動機づけ全体、因子 1、3、5 で、下位群の方が上位群よりも有意に動機づけが高かった。また、中位群と上位群においても、中位群の方が上位群よりも有意傾向で動機づけが高かった。このことから、上級者は日本語学習の動機づけが低いということが示唆された。

外発的動機づけは欠損欲求が充足すると消滅してしまうといった性格をもっていることはよく知られている(縫部他 1995)。因子 1「道具的動機づけ」、因子 5「日本語学習への興味」は外発的動機づけと言えるが、これらは欠損欲求の充足によって動機づけが低くなったと考えられる。よい仕事を得るために、もう十分に日本語能力を高めたといった充足感から動機づけの低下につながったのであろう。確かに、タイ国内で仕事を得るための日本語能力という点では十分であるかもしれない、これ以上の日本語学習動機づけは必要ないようにも思われる。しかし、国際交流基金 HP でも示すように、日本語教育は、海外での日本理解を深めるために、その核となるべき日本研究者の育成をすることが不可欠であり、この点においては日本語能力が高まった学習者にも更なる高みへと動機づけることが必要だと言える。

因子 3「好奇心、興味」は内発的動機づけと言えるが、内発的動機づけは、外発的動機づけが強いと抑制されてしまう可能性がある(エドワード 1980)。下位尺度の平均点を比較すると因子 1 の平均点 4.01 (SD=.07) や因子 5 の平均点 4.04 (SD=.78) と比べ、因子 3 の平均点は 3.35 (SD=.567) と低く、この点が影響している可能性がある。

6. まとめと今後の課題

本稿では、日本語を専攻しているタイ人大学生 90 名を対象に、SPOT と調査票によって得たデータの統計処理によって、日本語能力と動機づけの関係を検討した。結果として、以下のことが明らかになった。

- (1) 因子分析の結果、動機づけは 5 つの因子が抽出された。すなわち、因子 1「道具的動機づけ」因子 2「日本理解志向」因子 3「好奇心、興味」因子 4「誘発的志向」因子 5「日本語学習への興味」であった。
- (2) 日本語能力を下位群、中位群、上位群の 3 グループにわけ、これを条件とした一元配置分散分析を行った結果、動機づけ全体、因子 1、因子 3、因子 5 に有意差が認められた。
- (3) (2) で有意差が認められた因子について、Tukey 法による多重比較を行った結果、下位群と中位群の動機づけには有意差はなく、下位群と上位群、また中位群と上位群の動機づけには有意傾向が認められ、上位群の方が動機づけが低かった。

以上の結果から、初級、中級学習者は動機づけが高いが、上級学習者は動機づけが低いということがわかった。特に、外発的な動機づけに関しては、欠損欲求の充足によって、大きく低くな

っていることが明らかになり、上級学習者をさらなる高みへと動機づける方法について検討する必要があることが示唆された。

今後の課題は、質的な研究によって動機づけ構成のメカニズムや動機づけ減退のプロセスについて調査を行うことと、今回の調査で得たデータを基にコミュニケーション能力としての日本語能力を高めるための動機づけをどのように高めていくかを検討することである。

注

(1) 第2言語

(2) 先行文献における記述には、その先行研究の定義に従った。

(3) 筑波大学留学生センターの SPOT 研究チームより提供を受けた。

(4) 天井効果とは、その得点の平均値と標準偏差の和がとりうる最高値以上となるような、得点分布が高い方に歪んでいる状態のこと。

(5) 3 つ以上の平均値の相違を検討する場合には、分散分析 (ANOVA; analysis of variance) を用いる。独立変数が 1 要因の時、一元配置分散分析と呼ぶ (小塩 2004)。

(6) 2 群間での検定では t 検定がよく知られている。しかし、3 群以上の比較に t 検定を複数回繰り返すことは、第一種過誤率を増大させ、結果的に有意差が出る可能性を上げてしまい統計学上誤りである。多重比較については浜田 (1999) に詳しい。

参考文献

宇都木隆寿 (近刊) 「第二言語及び外国語としての日本語学習者における動機づけの比較—タイ人日本語学習者を対象として—」『日本研究論集』2 号、チュラーロンコーン大学文学部日本語学科

エドワード・L・デシ著、安藤延男・石田梅男訳 (1980) 『内発的動機づけ—実験社会心理学的アプローチ—』、誠信書房

小塩真司 (2004) 『SPSS と Amos による真理・調査データ解析 - 因子分析・共分散構造分析まで—』、東京図書

郭俊海・大北葉子 (2001) 「シンガポール華人大学生の日本語学習の動機づけについて」『日本語教育』第 110 号、日本語教育学会、pp130-139

倉八順子 (1993) 「プロジェクトワークが学習者の学習意欲及び学習者の意識・態度に及ぼす効果 (1)—一般化のための探索的調査—」『日本語教育』第 80 号、日本語教育学会、pp49-61

ケーマワン・センジンダーヴォン (2008) 「タイ人初級日本語学習者の動機づけ・授業活動・学習ストラテジーに関する調査—タイの日本語学校の場合—」『国際シンポジウム「日本語教育の諸問題」報告書』第 4-5 号、チュラーロンコーン大学文学部日本語学科、pp129-140

- 国際交流基金「理事長挨拶」『国際交流基金』 <<http://www.jpf.go.jp/>> 2011年3月10日
- 小林典子・フォード丹羽順子・山元啓史(1996)「日本語能力の新しい測定法[SPOT]」『世界の日本語教育』第6号、国際交流基金、pp201-218
- ゾルタン・ドルニエイ(著)米山朝二、関昭典(訳)(2005)『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』、大修館書店
- 成田高宏(1998)「日本語学習動機と成績との関係 - タイの大学生の場合 - 」『世界の日本語教育』第8号、国際交流基金、pp1-10
- 縫部義憲・狩野不二夫・伊藤克浩(1995)「大学生の日本語学習動機に関する国際調査—ニュージーランドの場合—」『日本語教育』第86号、日本語教育学会、pp162-172
- 端野千絵(2000)「日本語学習者の動機づけが学習到達度に与える影響—ネパールにおける学習者の観察から—」『2000年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会、pp69-74
- 浜田 知久馬(1999)『学会・論文発表のための統計学-統計パッケージを誤用しないために-』、真興交易(株)医書出版部
- フォード丹羽順子・酒井たか子(1999)「学習時間数と SPOT 得点の関係—インドネシア語話者およびタイ語話者に対するSPOT の実施結果より—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第14号、筑波大学留学生センター、pp109-119
- 守谷智美(2002)「第二言語教育における動機づけの研究動向—第二言語としての日本語の動機づけ研究を焦点として—」『言語文化と日本語教育』2002年5月増刊特集号、日本言語文化学研究会、pp315-329
- ラタナヴィラクン・アリア(2009)「日本語学習におけるビリーフと動機づけの関係に関する研究—タイ人ビジネスマンおよび大学生を対象に—」チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座修士課程修了論文
- Dörnyei,Z.(1999) Motivation .In B. Spolsky(Ed.), *Concise encyclopedia of educational linguistics*, 525-532 . Oxford : Pergamon Press .
- Dörnyei,Z.(2001) *Teaching and researching motivation*. Harlow: Longman
- Gardner,R.C.&W.E.Lambert.(1959) Motivational variables in second language Acquisition. *Canadian Journal of Psychology*, 13: 266-272, Toronto: the Canadian Psychological Association
- Gardner,R.C.&W.E.Lambert.(1972) *Attitude and motivation in second language Learning*. Rowley, MA: Newbury house.
- Gardner,R.C.(1985) *Social psychology and second language learning : The role of attitudes and motivation*, London: Edward Arnold